令和3年度　鹿児島大学附属図書館貴重書公開

薩摩国地理志の世界

「元禄国絵図　薩摩国」（国立公文書館蔵）

知覧本『薩摩国地理志』出水郡
（ミュージアム知覧蔵）

鹿大本『薩摩国地理志』薩摩郡百次
（鹿児島大学附属図書館蔵）

鹿児島大学附属図書館

館長あいさつ

鹿児島大学附属図書館では、本学学術研究院法文教育学域の研究者及び図書館職員で構成する貴重書管理委員会を平成10年度に設置して、翌年度から貴重書公開展を開催しています。さらに保存・公開等の長期的な利活用のために、貴重資料の電子化に継続して取り組み、ホームページ内の「鹿児島大学デジタルコレクション」で一般公開しています。さて、本年度の貴重書公開展は、「薩摩国地理志の世界」をテーマに、高津 孝教授（法文学系）監修による展示・ギャラリートーク、小林善仁准教授（法文学系）による記念講演会を企画しました。本学は、南北600キロに及ぶ県土をキャンパスに、地域とともにある大学「地（知）の拠点」として教育・研究・地域貢献を担っており、本展がまさに地と知を繋ぐ機会となりましたら幸いです。最後になりましたが、開催にあたりましてご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

令和3年11月

鹿児島大学附属図書館長　　橋口　知

目　次

『薩摩国地理志』…… 1
『薩摩国地理志』薩摩郡　菅原道真公の来薩 …… 2
『薩摩国地理志』甑島郡　甑島の歴史 …… 2
『薩摩国地理志』日置郡　花尾山平等王院 …… 3
『薩摩国地理志』川辺郡　もう一つの坊津八景和歌 … 3
『薩摩国地理志』頴娃郡　薩摩国一宮争い …… 4
『薩摩国地理志』揖宿郡　温泉 …… 4
『薩摩国地理志』阿多郡　交易と宗教 …… 5
『薩摩国地理志』伊佐郡　伊地知季安父子と伊佐郡 … 5
『薩摩国地理志』出水郡　二つの関門 …… 6
『薩摩国地理志』高城郡　京泊八景 …… 6
『麑藩名勝考』…… 7
『薩藩名勝志』…… 7
『諸郷名勝志』と『諸郷再撰帳』…… 8
『三国名勝図会』…… 9
『薩隅日地理纂考』…… 9
鹿児島の地図：元禄国絵図　薩摩国…… 10
鹿児島の地図：元禄国絵図　琉球国大島…… 11
鹿児島の地図：吉利郷惣絵図（薩州日置郡吉利惣絵図）… 12
鹿児島の地図：文政五年鹿児島城絵図…… 13

『薩摩国地理志』

鹿児島大学附属図書館所蔵『薩摩国地理志』（以下、鹿大本と略称）は、平成12年から14年にかけて本学教育学部教授中山右尚教授を研究代表者として本学を中心とする16名の研究者が参加した「近世薩摩における大名文化の総合的研究」（科学研究費補助金 基盤研究（A）(2)）の研究活動の一環として購入されたものである。『薩摩国地理志』は、『薩藩名勝志』『三国名勝図会』や各郷の名勝志、再撰帳に先行する地誌である。本書は鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　地誌備考二』（鹿児島県、2015年）解説（五味克夫）に詳細な検討があるが、これまで十分に活用されてこなかった。本企画展では、別系統の写本であるミュージアム知覧所蔵『薩摩国地理志』（以下、知覧本と略称）も参考にしつつ、『薩摩国地理志』を読み解くことで、江戸時代鹿児島の地誌編纂の様相を明らかにし、江戸時代、薩摩藩における地域情報について研究成果を公開する。

鹿大本は、剥落した表紙と推定されるものに「地理志」と墨書され、知覧本では元表紙に「地理誌／知覧屋敷」と墨書されている。したがって、本来の書名は「地理志」ないし「地理誌」であるが、内容が薩摩国十三郡を対象とするので、仮に『薩摩国地理志』と呼ぶ。鹿大本の最初には、目次となる一葉がおかれ、薩摩国十三郡の名称および配下の麓が列記されている（図表参照）。

鹿大本は欠落部分も少なく、目次も存在して全体構造を知るには便利であるが、追加増補が繰り返されており、本来の形態を確認することが難しい。知覧本は、現存部分が少なく、また虫損が激しいが、「知覧文庫」印が押されており、安政5年（1858）という書写年が明確で、本来の形態が保存されている。知覧文庫は、知覧島津家18代当主島津久峰（1732-72）の旧蔵書を、その子久邦（1753-91）が鹿児島城下から知覧の地に移し、知覧の郷校である胥傚館に保管したものである。

上記、五味解説によると、本書の原型は田尻種甫著『本藩地理志』で、成立は天明年間（1781-89）以前、その後、幕末の伊地知季安を含む複数人により増補などが行われたと推定されている。また同人には『本藩地理拾遺集』（鹿児島県立図書館所蔵写本により『鹿児島県史料集（31）本藩地理拾遺集上（薩摩国）』に薩摩国部分が翻刻）という著作があり、共通する部分も多い。（高津）

薩摩国十三郡　一覧（鹿大本目次による）

1	薩摩郡	百次　山田　隈之城　平佐　中郷　東郷　樋脇　入来　高江
2	甑島郡	上甑島　下甑島
3	日置郡	日置　吉利　永吉　市来　伊集院　郡山　串木野
4	川辺郡	川辺　加世田　山田　鹿篭　坊泊　久志秋目　硫磺島　竹島　黒島　七島
5	頴娃郡	頴娃
6	揖宿郡	揖宿　今和泉　山川
7	喜入郡	喜入　知覧
8	阿多郡	阿多　田布施　伊作
9	谷山郡	谷山
10	鹿児島郡	鹿児島　吉田
11	伊佐郡	大口　山野　羽月　佐司　黒木　霧田　宮之城　山崎　大村　藺牟田
12	出水郡	出水　阿久根　長島　野田　高尾野
13	高城郡	高城　水引

鹿大本は、今和泉と7,8,9,10を欠く。知覧本は、1,5,6,7,9,10,11と山田、高尾野を欠き、霧田を有する。

（左）知覧文庫印のある本文（伊集院）（右）知覧本・表紙『薩摩国地理志』（ミュージアム知覧蔵）

『薩摩国地理志』薩摩郡

菅原道真公の来薩

薩摩郡東郷に藤川天神（菅原神社）という神社がある。鹿児島の代表的な地誌である『三国名勝図会』（1843年編纂）によればこの神社には菅原道真の伝説が残っているという。大宰府に左遷された菅原道真がひそかに薩摩に来てこの藤川村で亡くなった。その跡地に建てられたのが現在の藤川天神というのである。

> 土人の伝へに、延喜中、菅丞相筑前国大宰府に左遷し給へる時、其害を避て潜に薩摩に来り、此地山水幽邃の境なるを以て匿居し、終に此地にて薨じ玉ふ。因て此に葬る。後人祠廟を建て、祭祀を修すといへり。（巻之十二）

ところがその30年ほど前に編纂された地誌『薩藩名勝志』では藤川天神について「北野の天神」と呼ばれていると菅原道真との関係をほのめかしているものの、菅原道真の来薩についての記載はない。今回の展示する『薩摩国地理志』の成立はおそらく『薩藩名勝志』よりも早いと考えられ、藤川天神すら出てこない。

江戸時代後期、各地の地誌・名所図会や神社の由来・由緒・縁起が整備されていくなかで、地元に残る伝説などが取り込まれていったと考えられる。中には偽説・偽伝などをまことしやかに作り上げたものもあったかもしれないが、今となっては真偽不明のものもある。ここで取り上げた菅原道真が薩摩郡で没して祀られているというこの由来は、にわかには信じがたいが、歴史のロマンを感じさせるものである。（亀井）

『三国名勝図会』巻之12　薩摩郡東郷藤川天神社
（鹿児島大学附属図書館蔵・玉里文庫）

『薩摩国地理志』甑島郡

甑島の歴史

江戸時代には薩摩藩外城の一つであった甑島郡甑島郷に関して、『薩摩国地理志』は「上甑島」（現在の上甑島と中甑島）と「下甑島」（現在の下甑島）に分けて把握している。知覧本の『薩摩国地理志』は、①「上甑島」と「下甑島」それぞれの大きさや島名の由来、②中世以来の甑島の歴史、③島にある社寺・牧の名称などや遠見番所の位置と数、④島内の各村の石高、⑤近世における歴代の地頭の名前、の順に記載しているが、鹿大本では②を構成する箇条書きや⑤が③の中に混在している。①のように知覧本のほうが鹿大本より詳しく書かれている箇所があることなども、知覧本は鹿大本に修訂を加えたものかという五味克夫氏の推測の裏付けとなる（『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　地誌備考四』解題）。

甑島の歴史は、鎌倉時代から豊臣政権期まで当地を領有していた小川氏を中心に叙述されている。鎌倉幕府の御家人であった小川季能が承久の乱（1221）での戦功により甑島（当時は島津荘の一部）の地頭に補任され、その子季直の代に小川氏は甑島に下向したとされる。中世後期においても、十三代目の小川中務（小川有季か）まで当島を領有していたというが、文禄年間（1592-1596）に島津義久によって小川氏は田布施高橋へ移封された。その後、島津家久が本田親政を甑島地頭とするまでの間、甑島は「主宰無」き（人々の上に立ち物事を取りはからう者がいない）状況だったと『薩摩国地理志』には記されているが、その間は地頭代官が任命されていたとする史料もある（「甑島郡地誌備考」所収「横川郷酒匂氏由緒」）。（金井）

知覧本『薩摩国地理志』甑島郡
（ミュージアム知覧蔵）

鹿大本『薩摩国地理志』甑島郡
（鹿児島大学附属図書館蔵）

『薩摩国地理志』日置郡

花尾山平等王院

10世紀に成立した『倭名類聚鈔』（和名抄）によれば、古代の薩摩国には富多・納薩・合良の三郷からなる「日置郡」が存在した。しかし、建久8年（1197）に薩摩国国衙の在庁官人から鎌倉幕府に注進されたとみられる「薩摩国図田帳」には「日置郡」という記載はなく、古代における「日置郡」の郡域には、中世において伊集院、市来院、日置北郷、日置南郷、日置荘などの院・郷・荘が成立していたとみられている。そして江戸後期に編纂された『薩摩国地理志』は、日置郡を日置、吉利、永吉、市来、伊集院、郡山、串木野の七郷とする。このうち日置・吉利・永吉の三郷が私領で、ほかは地頭が支配する藩の直轄地であった（『鹿児島県の地名』平凡社）。

この七郷それぞれについて、『薩摩国地理志』は、大まかな歴史、域内に所在した城跡・社寺・番所、郷内の村ごとの石高、歴代の地頭などを記す。仏教史の観点からは、明治期に廃仏毀釈が行われるまで各郷に存在した寺院を記録している『薩摩国地理志』は、貴重な史料の一つといえる。掲出した箇所には、郡山郷にあった花尾山平等王院、真木山法幢寺（以上、真言宗）、西光山圓照寺（曹洞宗）が見える。平等王院は、島津氏の祖惟宗忠久が創建したとされる花尾権現（現在の花尾神社）と縁があり、同社の別当寺の位置付けにあった。（金井）

鹿大本『薩摩国地理志』日置郡郡山
（鹿児島大学附属図書館蔵）

『薩摩国地理志』川辺郡

もう一つの坊津八景和歌

八景という、八つの風景を取り上げ絵画化し、それぞれに詩歌を付けるという行為は、11世紀から12世紀にかけての中国で成立する。最初に取り上げられた八景は、現在の湖南省に位置する瀟水や湘水、洞庭湖の風景「瀟湘八景」で、北宋の画家宋迪によって、八つの画題「平沙落雁、遠浦帰帆、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、煙寺晩鐘、漁村落照」で絵が描かれ、やや時代の下る覚範恵洪（1071-1128）という禅僧によって八首の漢詩が作成された。この「瀟湘八景」は、中国で大変流行し、日本へは、禅宗文化とともに伝わる。鎌倉・室町時代には、五山と呼ばれる禅宗寺院において瀟湘八景詩が盛んに創作された。各地で八景が設定されていくが、中でも最も有名な近江八景は、画題と和歌がセットになったもので、近衛信尹（1565-1614）の選定になるとされている。坊津八景は、『薩藩名勝志』巻6に「坊津八景、近衛信輔（＝信尹）公、当津に左遷し給ひし時、八景の題撰びて各和歌を詠じ給ふ」と見え、近衛信尹が讒言を受けて文禄3年（1594）から3年間坊津に配流されていた時期に、作成されたものである。『薩摩国地理志』には、近衛信尹の八景和歌とともに、薩摩の歌人日高為春の八景和歌が掲載されている。日高為春（1650-1718）は、京都の公家中院通躬に和歌を学び、薩摩の和歌集『松操和歌集』にも和歌が取られている。（高津）

鹿大本『薩摩国地理志』坊津八景和歌
（鹿児島大学附属図書館蔵）

『薩摩国地理志』頴娃郡

薩摩国一宮争い

開聞宮（枚聞神社）は、開聞岳を神体とし、『延喜式』神名帳にも名の見える古い伝統を有する神社である。元々、開聞宮は薩摩国一宮とされていたが、薩摩国府（川内市）から遠いという問題点があった。元寇（1274年、1281年）後の弘安7年（1284）、鎌倉幕府は異国降伏祈願のために守護島津氏に薩摩国一宮の注進（詳しい報告）を命じたが、この時、薩摩国府近郊の新田宮の神官が、同社が一宮であることを主張、開聞宮と相論が始まった。正応6年（1293）守護島津忠宗は、薩摩一宮は相論中のため、幕府の指示に基づき近例によって剣・神馬を新田宮に献上したが、新田宮を一宮と決定したわけではないと新田宮に伝えている（新田神社文書）。図版にあるように、永仁5年（1297）頴娃憲純は、「当国一宮」と刻んだ梵鐘を開聞宮に奉納し、開聞宮こそが一宮であることを主張している。『薩摩国地理志』では鐘銘を「奉施入／當國一宮開門社／鎚鐘壹口／鑄用途壹百貫文／右所奉施入如件／永仁五年三月八日／當郡領主左衛門尉憲純」とする。（高津）

鹿大本『薩摩国地理志』頴娃郡・開聞宮
（鹿児島大学附属図書館蔵）

『薩摩国地理志』揖宿郡

温泉

揖宿は温泉で有名で、幕末の『三国名勝図会』（1843年序）巻21揖宿郡・揖宿の山水には、摺之濱温泉、弥次ヶ湯、二月田温泉が項目に建てられ、温泉合記に港の湯、大牟礼湯、三節湯、間水湯、柴立湯の名が見える。摺之濱温泉の説明には、「沙蒸は諸病を治し」とある。『薩藩名勝志』（1806年序）巻8揖宿郡・揖宿には、揖宿郷には温泉が8カ所（西方村柴立、二月田、東方村間水、十町村田畑尻、弥次ヶ湯、村潟、十二町村湊、摺之濱温泉）あると記し、江戸初期の薩摩藩主島津光久（1616-95）の漢詩文「題摺之濱温泉館詩」を載せ、奇特の験湯として神井と命名したことを記す。天明年間（1781-89）以前の成立と推定される『薩摩国地理志』では、揖宿に「浦二　摺之濱　湊浦　村六　摺濱湯　湊湯」とあり、湯（温泉）は浦に対応している。浦は漁村であり、揖宿の温泉が海岸部に位置し、発展したことを示している。また、揖宿郡・山川も温泉で有名であり、『薩摩国地理志』には「温泉三　児ヶ水湯　鰻湯　鳴川湯」とある。（高津）

鹿大本『薩摩国地理志』揖宿郡・山川
（鹿児島大学附属図書館蔵）

鹿大本『薩摩国地理志』揖宿郡・揖宿
（鹿児島大学附属図書館蔵）

『薩摩国地理志』阿多郡

交易と宗教

阿多郡は薩摩半島南西部に位置し、万之瀬川河口域等において交易が行われていた可能性が指摘されている。保延四年（1138）十一月十五日付阿多郡司平忠景寄進状案（二階堂文書）には、忠景が阿多郡内相伝私領を観音寺に寄進している事が記載されている。この観音寺は、本来現南さつま市金峰町浦之名観音寺原に位置していたと考えられている。観音寺は、南薩の霊峰として知られる金峰山の中央にある本岳山頂に位置する蔵王権現の別当寺である。観音寺は、江戸後期に編纂された『三国名勝図会』には真言宗寺院として記載されているが、平安～南北朝前期には天台系寺院であると考えられている。交易品の博多から他地域への流通や販売に山僧・日吉神人・八幡神人が関わっている可能性を踏まえて、観音寺も博多にもたらされた交易品を薩摩国にもたらす天台系寺院のネットワークに位置づけられていた事が推測されている。嘉吉3年（1443）島津忠国により観音寺は場所を移転され、金蔵院と改称された。旧寺地に観音寺原の小字名が残り、その西隣の字宮ノ下に日枝神社が祀られている。この字宮ノ下・観音寺原から金峰山中腹に至る尾根筋に観音寺と院坊・末社群が存在していたと考えられている。（日隈）

知覧本『薩摩国地理志』田布施、観音寺
（ミュージアム知覧蔵）

『薩摩国地理志』伊佐郡

伊地知季安父子と伊佐郡

伊佐郡は、鹿児島県北部の大口・山野・羽月の三郷（外城）および祁答院七ヶ郷（宮之城・黒木・山崎・大村・藺牟田・鶴田・佐志）の各郷を含む地域で、現在の伊佐市、さつま町、薩摩川内市にまたがっている。大口は肥後と境を接する交通の要衝であり、中世末期には島津氏が球磨の相良氏や菱刈氏と一進一退の攻防を繰り広げた地域である。『薩摩国地理志』では、後の名勝（名所）を中心とした地誌に比べ中世の戦闘の記録が詳しく記されている。たとえば、大口における大口城、市山城などをめぐる攻防戦の模様や、西原八幡社に祭られた大島出羽守忠明や新納武蔵守忠元の戦闘の事績である。

一方、鹿大本『薩摩国地理志』には江戸後期の歴史家、伊地知季安（小十郎）が、伊佐郡で地頭職を拝命した先祖の記事を追加しているのが確認できる（図版）。伊地知家と伊佐郡の関係は深く、伊地知家六代の重康は、祁答院平川から大口平泉に移っている（墓碑銘によれば重康は慶長13年（1608）に大口で没したという）。季安の子、季通は嘉永6年（1853）から8年間にわたり大口地頭代を務め、『両院古雑徴』を編纂するとともに、明治維新後は鹿児島県に出仕し、『旧記雑録』『地誌備考』などの編纂に関与している。（丹羽）

一伊地知民部少輔、祁答院平川ノ地頭タリシコト此モ右根元記ニ見エタリ、□按民部少輔八今小十郎□（家か）ノ祖ニシテ名ヲ重康ト云、天正六年平泉地頭ヲ玉ハリ、宮ノ城ヨリ移ルト云ヘリ、……

鹿大本『薩摩国地理志』（左）大口城　（右）宮之城の季安書入れ
（鹿児島大学附属図書館蔵）

『薩摩国地理志』出水郡

二つの関門

藩領外との往来を厳しく取り締まっていた薩摩藩は、出水郡を海陸ともに重要な関門と位置づけていた。そのひとつが「下鯖渕村之内野間原」にある「御関所御番所」、すなわち野間の関である。知覧本には「御切手無く御通行する事を許さす」とあり、寛政4年（1792）3月に当関で足止めされた高山彦九郎（1747-1793）が「薩摩人いかにやいかに刈萱の関も鎖さぬ世とは知らずや」と憤慨したことでも知られる（『筑紫日記』）。もうひとつが、「薩摩ノ迫門」である。出水と長島の間に位置し、「南に大洋を受、潮汐逆行して来り、大河洪水漲り落るに似たり」（『薩藩名勝志』）、「甚険悪にして、舟船或は渦洄の為に旋沈せられて、覆没の患往々多し」（『三国名勝図会』）難所であったことが知られる。

一方で、『万葉集』巻3に長屋王（676 or 684-729）が詠んだ歌があることから、薩摩国の名所としても知られる。鹿大本は『夫木和歌抄』にある公朝権僧正（1206 or 1208-1296）、『万葉集名寄』（『万葉集』巻6）にある「大伴家持（718?-785）」（『三国名勝図会』では大伴旅人（665-731））の歌を載せ、知覧本はそれに加えて細川幽斎（1534-1610）、「江戸　原安迪」の歌を載せる。（佐藤）

知覧本『薩摩国地理志』
出水郡・御関所御番所
（ミュージアム知覧蔵）

鹿大本『薩摩国地理志』
出水郡・薩摩の迫門
（鹿児島大学附属図書館蔵）

『薩摩国地理志』高城郡

京泊八景

川内川河口に位置する京泊（現、薩摩川内市港町京泊）は、「水上三リ弐十丁、潮入干潮之時分深四尺、潮満之時ハ弐尋弐尺。湊廣サ二丁、大船三百艘程繋。西風南風舟之出入不自由、洪水之時ハ船繋不成」（鹿大本）川湊として発達した。宝永6年（1709）には津口番所・遠見番所・火立番所が置かれていたが（「列朝制度」）、のちに対岸の久見崎に移転した。

この地は、対岸に高江村久見崎を望み、海上には甑島を遠見する佳景の地として知られ、日高為春と平山季長が「京泊八景」（関屋夜雨（『三国名勝図会』は関屋夜燈）・洲崎群鷗・浄鏡晩鐘・吹上松風・唐濱汐水・西海行舟・甑島白雲・入江秋月）を詠んだ。「浄鏡」は、慶長2年（1597）2月創建の「無量山浄鏡寺　浄土不断院末寺」（『薩摩国地理志』）を指す（『薩藩名勝志』）。また、「唐濱」は、「高城西方浦より眺望するに佳景なり」（『薩藩名勝志』）とあり、蝶夢編『俳諧名所小鏡』下巻（寛政7年（1795）刊行）においても、伊勢の春渚、筑後の君山が詠んだ発句二句が収められている。（佐藤）

知覧本『薩摩国地理志』高城郡・京泊八景
（ミュージアム知覧蔵）

『麑藩名勝考』

全10巻、巻1-4が薩摩国、巻5-7が大隅国、巻8-9が日向国、巻10が南島部である。著者は、薩摩の国学者である白尾國柱（1762-1821）。本書は寛政7年（1795）の二つの自序（巻1巻頭及び巻10巻頭）を有する。序によれば、神代三陵についての誤伝を正すために執筆された『神代三陵考』（寛政4年）が十分な成果を挙げなかったために、旧稿をさらに精緻にし、二、三の名勝及び南島の歴史等を付け加えたとする。しかし実際には、薩摩、大隅、日向及び南島の名勝、神社等についての、根拠を明示したバランスの取れた記述となっている。特に3ヶ月も実際に滞在した坊津についての記述は詳細である。例言には「古戦場・故城址・食貨・物産・山川・里数・田数・戸口等」は記述しないとあるので、地域情報の中核をなすこれらが記載された先行する資料の存在が示唆される。翻刻として、『鹿児島県史料　麑藩名勝考』（鹿児島県維新史料編さん所、1982年）があるが、東京大学史料編纂所所蔵写本8巻に基づくもので、日向国の後半、南島部を欠く。（高津）

『麑藩名勝考』巻7　大隅国　吾平（あいら）山陵図
（鹿児島大学附属図書館蔵・玉里文庫）

『薩藩名勝志』

文化3年（1806）8月の平山武毅の序を有する。写本19巻、薩摩国：巻1.2鹿児島郡、巻3伊佐郡、巻4薩摩郡、巻5日置郡、巻6河辺郡、巻7河辺郡・阿多郡、巻8谷山郡・給黎郡・揖宿郡・頴娃郡、巻9出水郡、巻10高城郡・甑島郡、大隅国：巻11.12囎唹郡、巻13始羅郡、巻14菱刈郡・桑原郡、巻15肝属郡、巻16大隅郡、日向国：巻17.18.19諸県郡。本書は、薩摩藩記録奉行の本田親孚が藩主の命を受けて、寛政4年ごろ藩命により各郷から上進された地誌調査結果に加え、3年をかけて藩内の名勝古跡を巡り、景勝地や由緒ある寺社を絵に描き、由来を調査して草稿をまとめあげたが、大島代官に赴任することになり、その後、仕事を引き継いだ記録奉行の平山武毅が数ヶ月かけて補足整理を行ない完成させたものである。薩摩藩での初めての絵図入り名勝志で、絵図は人を必ず書き入れることで縮尺を明示している。凡例には「藩中凡二十二郡」というが、熊毛郡（種子島）、馭謨郡（屋久島）は含まない。鹿児島県立図書館所蔵本による翻刻『鹿児島県史料集　薩藩名勝志』（その一・その二・その三）（鹿児島県史料刊行会、2003-05年）がある。鹿児島大学附属図書館玉里文庫所蔵本には、固有名詞に全て振り仮名が付されており、江戸時代の読みを確認できる。（高津）

『薩藩名勝志』巻2　荒田八幡宮
（鹿児島大学附属図書館蔵・玉里文庫）

『諸郷名勝志』と『諸郷再撰帳』

薩摩藩において地誌編纂の活動が始まったのは、島津家25代島津重豪の時代である。天明年間から寛政年間にかけて、薩摩藩内の各郷に高山・大川・神社・仏閣・旧跡・物産等について調査し報告せよとの命が下された。この時の報告書の控（諸郷名勝志）が幾つか現存しているが、最も早い年号も持つものとしては、天明7年（1787）市来郷のものがある。これらの報告書が藩の記録所に集められ、総合的な薩摩藩の地誌資料集が成立した。これに基づき、訂正を加え、不足を補い、絵図を作成し、薩摩の名所を詠んだ詩歌を収集し出来上がったのが、文化3年（1806）序、本田親孚・平山武毅編『薩藩名勝志』19巻である。編者の二人は、前後しての記録奉行である。この『薩藩名勝志』は刊行されることなく、稿本が玉里文庫に所蔵されている。さらに、文政7年（1824）、再び薩摩藩内の各郷に、高山・大川・神社・仏閣・旧跡・物産等について、前回の報告書を訂正増補して提出せよとの命が下された。この時、記録所に提出されたものは「再撰帳」と呼ばれる。これらの再撰帳をまとめ上げ、『薩藩名勝志』を増補改訂したものが、天保14年（1843）序、五代秀堯・橋口兼柄編『三国名勝図会』60巻である。諸郷名勝志、再撰帳は原本が藩の記録所に送られ、各郷には控えが残されたが、それらの幾つかは独自に増補がなされ、現在に伝わるものがある。

『大崎名勝志』に引用された「名勝志糺方御案文写」によれば、「御領国中高山・大川・神社・仏閣・名所・旧跡・古城・古戦場、並郡郷村里・山海・原野・産物等」の全てについて調査報告することが要求されており、さらに個々の事例について、詳細な基準が示されている。例えば、絵図については、「一、郷麁絵図調様之次第　一、諸郷・私領等、郷之麁絵図、何州何郡之内何郷と相記、他国は勿論、他郡他郷え相境候所は、境目大墨引を以相分、一郷之惣廻り何程、村々何ヶ村と相記、小墨引を以是又境引いたし、銘々村名並字迄も書記、川筋は小川・枝河迄も書記、道筋は細道迄も朱引を以相記、地頭・領主仮屋之場所並其所宗廟之神社・祈願所・菩提寺・高山・城跡等は、夫々之場所え可相記事」と要求している。注目すべきは、『薩藩名勝志』『三国名勝図会』には採用されなかったが、「所惣高並百姓・町人・浦浜人、惣人体、竈数等」や「往古まで之領主・地頭代々名前・年代等」も要求されていることで、すなわち、諸郷名勝志・再撰帳は、『薩藩名勝志』『三国名勝図会』に反映されていない重要な地域情報の宝庫であることを示している。（高津）

『知覧・名所旧跡御糺方ニ付取しらべ帳留』表紙・巻頭
（ミュージアム知覧蔵）

『知覧　名勝志再撰取調帳』表紙・巻頭
（ミュージアム知覧蔵）

『加世田名勝志　下』娘嫣権現縁紀　文政7年年号
（加世田郷土資料館蔵）

『頴娃郷旧跡帳／長嶋名勝志再選方』
頴娃　旧跡帳　表紙・巻頭
（鹿児島県立図書館蔵）

『三国名勝図会』

天明年間から寛政年間にかけて、薩摩藩内の各郷に高山・大川・神社・仏閣・旧跡・物産について調査し報告せよとの命が下され、各郷からの報告書が藩の記録所に集められ、総合的な薩摩藩の地誌資料集が成立した。これに基づき、訂正補足を加えて出来上がったのが、文化3年（1806）序、本田親孚・平山武毅編『薩藩名勝志』19巻である。さらに、文政7年（1824）、再び薩摩藩内の各郷に、前回の報告書を訂正増補して提出せよとの命が下された。この時、記録所に提出されたものが「再撰帳」である。『薩藩名勝志』を基礎に、これらの再撰帳をまとめ上げたものが五代秀堯・橋口兼柄編『三国名勝図会』60巻である。天保14年（1843）の序文を有するが、江戸時代には公刊されることはなく、山本盛秀の編纂・発行という形で、明治38年（1905）和装20冊の活字本として出版された。鹿児島大学附属図書館玉里文庫には、草稿本59巻39冊（天の部70番619）が所蔵され、詳細な校正がなされている。これを浄書したものが清書本（天の部69番618）60巻60冊で、活字本に一致する。（高津）

『三国名勝図会』草稿本　巻5福昌寺
（鹿児島大学附属図書館蔵・玉里文庫）

『薩隅日地理纂考』

本書は、明治4年（1871）樺山資雄の序文が付されているが、明治7,8年ごろまでの加筆訂正を経て完成したと推定されている（原口虎雄・同書解題）。凡例によれば、編纂にあたって、八田知紀・高木秀明・田原篤実・新納実枝・樺山資雄が任命されたが、途中、八田・高木・田原が転出、関盛長・境田通古・町田俊徳・山名亨・有馬某等が補充された。本書の特徴は、廃仏毀釈に至る国学思想の影響を受けて『三国名勝図会』の寺院の項目を全て削除したこと、各郷、各村の旧跡・沿革が詳細に記載されていること、『三国名勝図会』には無かった各郷の石高、戸数、人数が追加されたことである。収録範囲は、巻1が三国総説、薩摩国：巻2.3鹿児島郡、巻4.5日置郡、巻6薩摩郡、巻7薩摩郡・甑島郡、巻8伊佐郡、巻9出水郡、巻10高城郡、巻11.12川辺郡、巻13頴娃郡（頴娃郷）・阿多郡、巻14喜入郡・揖宿郡・頴娃郡（山川郷・今和泉郷）・谷山郡、大隅国：巻15.16姶羅郡、巻17.18贈於郡、巻19贈於郡・桑原郡、巻20菱刈郡・大隅郡、巻21.22大隅郡、巻23肝属郡、巻24熊毛郡・馭謨郡、日向国：巻25-28諸県郡である。本書は、明治31年に活字本として鹿児島県教育会より刊行され、昭和46年に解題を付して、原口虎雄・田実勇・前床重治校訂により鹿児島県地方史学会より再刊された。（高津）

『薩隅日地理纂考』（左）巻2巻頭　（右）扉
（鹿児島大学附属図書館蔵）

鹿児島の地図：元禄国絵図　薩摩国

「元禄国絵図　薩摩国」（国立公文書館蔵）

鹿児島の地図：元禄国絵図　琉球国大島（おおしま）

「元禄国絵図　琉球国大島」（国立公文書館蔵）

『薩摩国地理志』の成立よりやや早い元禄期に作成された国ごとの絵図である。江戸幕府の命令を受け、島津家では薩摩・大隅・日向の3ヶ国に加え、支配下の琉球国の国絵図（沖縄島・大島・八重山島）を作成しており、他地域の国絵図と比較して、島津家の作成した国絵図は、島のかたちや海岸線などが精緻な図と言われている。

城下名・村名などを記載する他、山・川・湖・主要な神社仏閣といったランドマークに加え、古城跡も描かれている。「薩摩国絵図」を詳しく見ると、川辺郡に属した吐噶喇（とからら）列島の諏訪之瀬島・中之島・口之島と、三島の硫黄島からは山頂に噴煙を描いている様子が読み取れる。（小林）

【参考文献】

国絵図研究会編（2005）『国絵図の世界』, 柏書房 .

鹿児島の地図：吉利郷惣絵図（薩州日置郡吉利惣絵図）

「薩州日置郡吉利惣絵図」（日置市教育委員会蔵、鹿児島県歴史・美術センター黎明館寄託）

近世には、在方の町や村など城下町以外の地域でも様々な絵図の作成が行われた。「郷」は、島津家の領国支配に用いられた地域の単位であり、郷の中には外城衆中（郷士）が集住する「麓」を中心に、農民の住む「在」、商売が行われる「野町」、漁業や海運業が行われる「浦」で構成されていた。「郷」を対象とした絵図が郷絵図であり、「薩州日置郡吉利惣絵図」の図題をもつ本図もその一つである。

薩摩国西部に位置した吉利郷（現在の日置市日吉町吉利）は、一所持で家老も務めた禰寝氏（のち小松氏）の領地である。元禄12年（1699）に禰寝清雄が領内の田畑や他領との境界を実測調査し、吉利郷全体の詳細な絵図（惣絵図）を作成した。この図が50年余り経過して著しく破損していたため、元禄期の惣絵図を原図として小松清香が宝暦3年（1753）10月に複写したのが本図である。

縦3.5m、横3.05m の彩色の大図で、郷の中心である領主仮屋をはじめ、衆中（郷士）屋敷や神社仏閣、山・川・海岸の並木など詳細な情報をもつ。詳細に見てみると、仮屋と郷士屋敷は区画と文字情報とで詳細に記しているのに対し、武家屋敷以外の集落や田畑などの描写は簡略であり、対象による描き分けが認められる。なお、本図は平成25年（2013）4月23日に「吉利郷惣絵図」として鹿児島県の有形文化財（古文書）に指定されている。（小林）

【参考文献】

日吉町郷土誌編さん委員会（1982）『日吉町郷土誌』上巻 , 日吉町 .

鹿児島の地図：文政五年鹿児島城絵図

「文政五年鹿児島城絵図」（鹿児島大学附属図書館蔵・玉里文庫）

部分拡大図

絵図のなかには描かれた地図の時期と作成年の異なるものが存在する。図題に文政5年（1822）とある本図は、島津久光の作成した図を包紙によれば大正5年（1916）、表紙の題簽によれば大正15年（1926）に複写したものである。なお、鹿児島県歴史・美術センター黎明館玉里島津家資料に同種の絵図が伝わる。

鹿児島（鶴丸）城から磯まで、つまり鹿児島城下町の北部から北郊にかけての範囲を描き、城跡・神社仏閣・名所旧跡には久光による考証とみられる由緒を記す。なかでも、東福寺城や清水城といった城跡に関する記述は詳細である。

鹿児島（鶴丸）城の南を見ると、現在の照国神社付近に「大雄山佛日寺 南泉院 天台宗」とあり、隣に「東照宮」と記されている。また、南泉院と比志島家屋敷との間を城山への登城路が通り、大手口の番所や近年の発掘調査で遺構の見つかった門が描かれている。（小林）

【参考文献】

五味克夫（1973）「玉里文庫本『文政五年鹿児島城絵図』について」鹿大史学21,37～42頁 .

令和３年度鹿児島大学附属図書館貴重書公開

薩摩国地理志の世界

編　者

高津　孝（法文学系教授）

執筆者

丹羽謙治（法文学系教授）
金井静香（法文学系教授）
小林善仁（法文学系准教授）
日隈正守（教育学系教授）
亀井　森（教育学系准教授）
佐藤宏之（教育学系准教授）

発　行

鹿児島大学附属図書館
https://www.lib.kagoshima-u.ac.jp/
〒890-0065 鹿児島市郡元１丁目 21－35
☎099－285－7460

発行日　令和３年11 月５日

印　刷

斯文堂株式会社

フェスタ
国立大学2021

画像出典：（上から）
知覧本 『薩摩国地理志』伊集院（ミュージアム知覧蔵）
鹿大本『薩摩国地理志』入来（鹿児島大学附属図書館蔵）
「元禄国絵図大隅国」（国立公文書館蔵）
知覧本 『薩摩国地理志』阿多郡（ミュージアム知覧蔵）